

## 歎異鈔第五章 念仏即孝道

### 第一節 超功利の念仏

一。親鸞は父母の孝養のためとて、一遍にても念仏まをしたることいまださふらはず。

### 第二節 衆生観と念仏

そのゆゑは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏になりて、たすけさふらふべきなり。

### 第三節 非行非善の念仏

わがちからにて、はげむ善にてもさふらはばこそ、念仏を廻向して父母をもたすけさふらはめ。

### 第四節 念仏即孝道

ただ自力をすてて、いそぎさとりをひらきなば、六道四生のおひだ、いづれの業苦しづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと云々。

### 第一節 超功利の念仏

「親鸞は、父母の孝養のためとて、一遍にても念仏まをしたることいまださふらはず。」

この章はまことに聖人の念仏の境を孝道に即して頂戴するのにたいへんありがたい章であります。聖人一流の明澄清浄なる道義観、特に念仏と生活との交渉をうかがうのに大切な一章であります。

「念仏」は愚禿親鸞の生命であります。それであればこそ「父母の孝養のためとて、一遍にても念仏まをしたること、いまださふらはず」と断言されるのであります。

四歳にして父を失い、八歳にして母と永別なされた聖人であります。この悲しき孤児の御身には父を求め母を恋うる心が一生を貫きはしなかつたであります。世尊すら成道後、一夏を母まします天上に送りたもうたと言ひ、また善財童子の五十三人の善知識中には、仏母摩耶夫人のましますことを思えば、世尊の胸中には七日にして別れたまいし母のましますことが知られます。聖人の胸中にもまた、孤児を悲しみ、父を求め母を求めたもう心があつたことでありましょう。かかる悲しき運命の聖人は、やがて大地にあつては法然上人、彼岸にあつては本仏弥陀、久遠のみ親にお会いなさつたのであります。本願の名号は、廻向顕現して愚禿の生命となつたのであります。しかるにその念仏を亡き父母のために廻向する意では、一遍も申したことはないと仰せられるのであります。多くの世間の人は、奇異に感ずることでありましょう。

聖人のお念仏は、この念仏を何かにふりむけて、自分の請求するところのものを得ようとする一切の功利的なものを持たない念仏、すなわち無功利、超功利の念仏であつたのであります。

## 聖人と孝道

人間はその有縁の親しきもの、愛するものと死別した時、なんとかしなければならぬ必然の心の動きを持つております。親が死んだ、子が亡くなった、そうした時そのやるせない心を、何とかしなければおれない心が儀式を生むのであります。儀式をしたり、法事をしたりする、元始の心は、まことに切実な心の表現であつたことでもあります。しかるに一度この人間必然の心がゆるんできて、形式が先に走るようになり、まずと、祖先や親のためにお経をあげれば、それが功德になつて祖先が浮ぶとか、死んだ人のために年忌の法事はするのだとか、死んだ人のためにならなければ法事はやめるとか、つまらぬ議論が生れます。みな、生命の枯れた形式に功利的なものが付いたのであります。

いかに善いことをしても、それによつて善い果を得たいと求むることは、功利主義であつて真実のものではありません。念仏を何かにむけて、良い果を求めようとしななくても、念仏にはそれ自体の徳として、善い果が成就するのであります。ゆえにこの章は、念仏を孝道にふりむけるのでなくて、念仏自体の中から、真実の孝道の生れることを示されるのであります。

もしこの歎異抄の御文を曲解し親鸞聖人をおとしい陥れんがために、親鸞は親に不孝なるものである。親のために念仏も申さず、その菩提も弔わぬというものがあるならば、それはあまりに常識的な考え方であり、あるいは悪しく解して聖人を誣いんとするものであります。聖人は真の孝道の成就者であります。また真に親の仏事をなせる人であり、聖人の孝道は、恩愛のみに終始せず、そこに真実の智慧の動いていることを忘れてはならないのであります。

## 念仏の親は

親は慈愛をもつて子を育て、子は親のご恩に目覚めて孝養をつくす、そこに孝道を成就するのでありますが、念仏を中心にして孝道を考えます時、親子の關係に次のような種類のあることが知られます。

- 一、念仏ある親の子に対する慈愛。
- 二、念仏なく無自覚な親の子に対する愛。
- 三、念仏の子の親に対する孝道。
- 四、念仏なき人の親に対する孝道。

真に念仏する親は、子どもに対しても信心の智慧をもつて向かいます。念仏の親の唯一の願ひは「どうかわが子よ念仏の人になつてくれ」ということであります。わが愛子は今、旅路に出発せんとします。その時、親は念じます。これからはもう親の手のとどかぬところに出てゆくのである。その行く手にはいばらの道も待つているであらう。虎も狼もいるであらう。わが子の運命よ恵まれてあれ。わが子よ。親を安んぜんとならば、どうか仏の子になつてくれ。金剛不壊の大信力に乗托して生きてくれ。不滅の信力に生きてくれてのみ、遙かなる旅にあつても親は安心するであらう。汝が立身出世することも嬉しいが、それよりもなお、汝が正しく人の道を歩んでくれ

ることをより深く願っている。それが念仏の親の真の願いであります。この親が、子供に對して、孝子たれとは、永遠の真実道を歩めということであり、親に信心の智慧があつてはじめて、親の慈悲は絶対のものとなります。この親に對しての孝道とは、子らが親に甘いものを食わせたり、樂をさせたり、芝居や映画を見せたりしてくれることではなくて、子ども自身、自ら無我の大道に立つて自己を真実に完成してくれることでもあります。

### 盲愛か真愛か

念仏の親の子に對する願いは、永遠に真実道を歩め、大乘無上の法たる念仏道を歩んでくれということでもあります。それが親の子に對する唯一の願いであります。

親は子に對して何を要求するか、子は親に對して何を要求するか、夫が妻に對して求める唯一の願いは何か、妻が夫に對しての願いは何であるか、そのことの決定こそは、まことに家庭を成就する最第一の問題であります。「念仏申してくれ。」これが願うことのありつたけになつた時、親子ともに助かることでもあります。人はそこまで、十八願に徹しなければならぬ。

子供にいろいろと悪いことが見えると、多くの親は、そこが悪い、ここがいけない、あれを改めよ、これをすてよと、事々に叱りつける。しかるに子に教えれば教えるほど言うことを聞かない。ゴム毬の一端を抑えるがごとく、ついにさまざま相の悪となつて出てきて、ますます親に反感を持ちつつ、子の心は親から離れてゆきます。

あるありがたい父は、子に向かつて「おまえらは、ただみ仏の子になつてくれ、念仏に生きてさえくれたら、あとは何をしてもいい。思うように生きてゆくがいい。」と言つていました。この心が少しは心配にも見える子どもの上にとどいた時、子らは念仏の内に治つて、何をしてもいいと許されつつ何のいらぬこともしない子になつていました。自分の妻の欠点をつき、自分の夫の短所をとりあげて、たがいに善を相手の上に求めて十年二十年と越えられない深い溝を作つてきた夫婦が、ともに大地に合掌して念仏に生きることができた日に、その長い間の溝がとれ、夫婦であつたお互の運命が喜び合つた人がおるごとく、親も子も念仏に生きたとき、子は親のご恩の前に真に頭が下り、親は子どもの運命について真に安心することができ、孝道が本質的に成就して、孝の上に親の慈愛と、子の感謝と一体に融け合つた相を拝むことができます。

ある念仏の母は、「お母さんに孝行がしたいと思つてくれるならば、どうか念仏の行者になつてくれ。お母さんは仕事に樂がしたいとも思わぬ。立派な着物が着たいとも思わぬ。お母さんは幸福にしていただいているから、たとい橋の下にも、菰を被る身になつても不幸ではない。ただみなの方が、金剛の信心に一筋に生きてくれるならば、お母さんには、これに越した喜びはない。」と言つた。子どもが外に享樂を追うかわりに、内に満たされて、人生のあらゆる順逆の中に絶対必然の大道を歩んでくれることを求める、念仏の親の真実の慈悲であります。

念仏嫌いの父がありました。曲がつたことの嫌いな、一徹な善人意識の強い父であります。しかるに次郎は、その父の嫌いな念仏に入りました。外に人生の享樂を追わ

ず、内に不滅に燃える信火によつて、その日々の行歩は、その周囲の人をして感歎せしめずにはおきません。親を養っているのもこの次郎であります。もちろんこの次郎を父は愛せないのではないが、それは次郎が父の生活になくてはならぬからであります。次郎にひきかえて、太郎は、父のごとく念仏などは毛虫ほど嫌いで、彼は自らの才をたのみ、かつての日には赤の鬪士となり、可惜あたらその一生の歩みを挫折したことがある。念仏と社会主義、およそ世にこれくらい相入れないものはあり得ない。しかるに、父母は、親の前に頭を下げたことなく、事々に当たりちらして今日まで心を痛めた恐るべき太郎が賢く見えて、これには痛いものに触れるがごとく、ただその機嫌の損せざることにつとめ、一方孝養をつくし念仏に生きる次郎は、いよいよ親の氣に入らない。この父は、太郎を社会主義にひき入れた人を一度も悪んだことはないが、次郎を仏の子にした者を、心から悪んでいるとしたら、世にこれほどの顛倒があります。しょうか。

「念仏なく無自覚なる親の子に対する愛」盲愛か、真愛か、考えなくてはおられませぬ。もちろん、念仏のない親の愛はすべて不可であるというのではない。真の念仏の親の慈愛は、仏智に裏附けられたものであるがゆえに正しい慈愛であると言うのであります。

## 念仏と孝道

如来に向かつて生きる子は、その胸中の合掌せざる我慢を、如来の大慈悲によつて融かされて、真実合掌し帰依する心を成就するのであります。この合掌の心は、そのまま親に向かつて頭を下げる心となります。したがって私は、真に念仏に生きて、しかも親不孝であつた子を見たことがありません。そこに念仏は、本質的に孝道を成就するのであります。

世に至つて恵まれた子とは、親としてりつぱな人格者を持つたことであります。親も念仏者、子も念仏者、こうした場合には、世にも美しい孝道を成就するようであります。人生は、そうした模範型の親子ばかりではない。世の親子には次のごとく

- ① 親もりつぱで、子もりつぱ
- ② 親はりつぱで、子は不良
- ③ 親が不良で、子はりつぱ
- ④ 親も不良で、子も不良

四つの場合があると思われます。このりつぱといふことも、不良といふことも、それは相対的な言葉で、いいにも八万四千、悪いにも八万四千ありましよう。善を究竟すれば、至純清浄真実の大信心であり、悪を掘り下げていけば、五逆誹謗正法の大邪見であります。

子は念仏行者であつて真実の一道を生きぬくの、親は世にも恐るべき悪党であるという場合があります。その時、親は親たらずとも、子は子たらざるべからず。痛ましくも悲しく、しかも尊い念仏の子の一道はそこに開いてきます。親のいかによつて、子の道に二つあるのではない。如来招喚のままに、子は必然の一道を歩みつつ合掌して、宿命の岩壁に打当たつて生きてゆきます。念仏の中には不可思議な力があ

る。この不可思議な、慈悲と智慧との聖火の力が、この親を、墓の此方で融かして聖火にするか、永遠の彼方で、合掌せしめるか。念仏の子の知ったことではありません。

人は一見、自分の周囲を改造したら救われると思っただけでありません。苦しまず、悲しまぬようになりたいと求めているようではありません。しかし、ほんとうはそうではなくて、正しく苦しむ、正しく楽しむ道を求めているのであります。いかに親が悪逆であろうとも、子どもに生きる道が決定した時、ゆるぎなき一道が生れた時、その道によって救われるのであります。百千万劫かかっても悪逆の岩壁が割れて、白蓮華が咲くことのあるべき必然の道を歩む、よしや地上では、念仏の自己が親によって嫌われ、目覚めざる親によって恐るべき迫害を報いられようと、そしてついに地上ではこの親の心が動かないにしても、子はついに不幸ではありません。悲しくしてしかもありがたき一道は子どもも念仏生活をそれゆえに輝きあらしめねばおかないであります。念仏はかくして、絶対の孝道であります。

世にはまた、これが親子顛倒して、親は世にもありがたく尊い存在であり、わが子に向かつて合掌して、わが子の内に、仏心の蓮華を誕生せしめずにはおかないと生きているのに、子はますます放蕩に身を持ちくずし、悪逆世にはびこっている場合があります。こうした場合における親の生活態度もまた、さきの場合と同一であります。もしこの親の心が子に徹入して、親子もろともに同一念仏の浄々心に一体である家庭が生れたら、そこにはじめて世の光となる家が成就して、祖先の感恩に報ゆるところの、日本の礎となる家が成就することあります。こうした家庭からは、血の遺伝によつて、長く仏心に生きる孝子、念仏の人を誕生せしめるのであります。

法事について

「親鸞は父母の孝養のためとて、一遍にても、念仏まをしたることいまださふらはず。」

この御文は、親鸞は、亡き父母に孝道をつくす心で、追善廻向のために、一遍にても念仏を申したことはない、と仰せられることにとれます。そのことはすでに少し申しておきましたが、聖人の仰せは、父母を思うて念仏申すということをしなと言われたわけではありません。あの世の親に供養廻向のためには念仏したことがないと言われるのであります。こうしたところも聖人は非常に明らかな道を歩んでいられたのであります。

先祖や亡き父母の忌日命日に仏事をして、お経の功力や、念仏の功德を廻向してあの世へ送りとどける、それは大変よいことのようにあります。しかしそこには考えなくてならぬ幾多の問題が潜んでおります。ことわっておきますが、日本においては、祖先の祭をする、祖先を大切にするということは、日本固有の美点であつて、日本の国の尊さはここに根ざしていると言つていいほどであります。祖先尊崇の徳風は、祖先の祭において現れることあります。しかしそれがいかなる心でなされるかということあります。

仏事法事は、報恩感謝の営みであり、懺悔合掌の行業であります。差上げるのではなくて、受け取るのであります。久遠劫来の大慈悲の中に合掌して、大悲のお育てによつて、今枯木に芽が出、花が咲いたほどの希有最勝の本願力に生かされたものは、今さらに、父母の恩、祖先の恩を憶念せずにはいられません。無根の深信によつて無限の光悦を与えられたものは、「何という幸者でありましょう」と、感謝せずにはいられません。いかに海山の恵みの中に包まれようと、「ありがとうございます」と頭が下らない者にとつては、いよいよ愚痴や得手勝手手の欲心を増すばかりであります。祖先が粒々汗と脂でためて残してくれた身代が、徳なく念仏のない子孫によつて、兄弟喧嘩の種となつたり、放蕩に身を特ちくずす因となつたりしたのでは、祖先のすべてを殺すことになります。でありますから、深い考えのある人は、一家の家憲遺言として、祖先を大切にせよ。念仏に生きよと残しております。人間の生きてゆく不動の足場は「ありがとうございます」の一心になくはならない。

一家の真の繁栄は、その家族が大地の上に伏して祖先の恩の前に頭を下げた日であり、一家荒涼の廢頽は、恩知らずが集まつて、自力貪欲に精神的和合を失つた日である。

すでに大恩の前に頭を下げた時、何で祖先のために父母のためという、功利的な高上りしたものをさしはさむ余地がありません。この大恩の前にひれ伏して、自我をあげて報恩謝徳に生きさせていただく肝要が失われてきて、法事の営みが墮落すれば、仏事は第二義第三義へとその真面目を見失い、集まる親属は、法事でなくて、食事のために集まり、僧侶はただ声帯労働におわることになつて、仏事は食事と労働と6に変わるであります。さらにそれが度をたかめると、家族は畑に出て働いている、僧侶がその留守に来てお経をあげて帰るといふようなことになります。お経さえ祖先へ上げたらいいのだとの誤解が徹底したのであります。「親鸞は父母の孝養のためとて、一遍にても念仏まをしたることいまださふらはず。」問題の第一義に立つて放たれた不滅の宣言であります。

## 第二節 衆生観と念仏

「そのゆゑは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏になりて、たすけさふらふべきなり。」

### 因縁観

「一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり。」それは、聖人の衆生観であります。「三界一切の男はわが父、一切の女はわが母と思え。」とは、仏教の衆生観であります。まことになつかしいものの考え方であります。「世々生々の父母兄弟」とは、久遠劫来、輪廻転生して、一切の衆生がごとごとく父であつたことがあり、母であつたことがあるうとのことである。そうした懐かしい考え方が仏教の哲理として、仏教の底を流れてきたのであります。「袖の振合い多生の縁」という言葉などほとんど世間一般の語となつてきました。でありますから、昔の聖者の中に、山路に山鳥の声を聞いてさえ、「ほろほろと鳴くやまどりの声きけば、父かとぞおもふ母かとぞおもふ。」

と詠まれた方さえありました。今貴方あなたにお会いしているのも、一世や二世の因縁ではない。まして、み法のこと、お念仏の中で、お会いした宿善こそは、乃往過去、久遠無量、不可思議無央数劫の大因縁を令諸衆生功德成就の本願大悲によって成就してください、その善因縁によってお会いさせていただいたことであります。本仏の大悲の光海において結ばれずとも、世々生々の父母兄弟であります。ましてや大悲本願の大信海において、心の眼を開かれた時、すべてはありがたい同朋であります。一切有情は、みなもて世々生々の父母兄弟と感じられた聖人は、さらに念仏の世界において、御同朋御同行といただく聖人でありました。平等の大悲に向って開かれたる眼は、そのまま同朋の上に開かれる眼であります。そこに、如来の智慧による新しい人生の広野が開いてきます。

#### 一切衆生を

親鸞聖人は、一切衆生を、世々生々の父母兄弟として感ぜられました。それは懐かしくも、温かき念仏の心の前に開いた新しい世界でありました。現世の父母はなつかしい。しかもその孝養の心はさらに信心の智慧によって一切衆生の上に展開して新しい人生の広野が開けてきました。一切衆生は世々生々の父母兄弟であるならば、これを愛せなくてはならない。迷うているなら救わなくてはならない、助けなくてはならぬものは無数であり、しかも助ける力は持たない、ここにおいて聖人は、その心を開いて、三つのことをお示しになりました。三つとは、

一には、「いづれもいづれも」

二つには、「この順次生に」

三には、「仏になりて」

の三義であります。この三義は、みな、「たすけさふらふべきなり。」にかかつております。①いづれもいづれもたすけさふらふべきなり。②この順次生にたすけさふらふべきなり。③仏になりてたすけさふらふべきなり。ということであります。

「いづれもいづれも」とは、一切衆生のことです。今生に限られた現身の父母だけを救うというような狭い念仏の世界ではなくて、一切衆生ことごとくを救わずば、というのが、仏の大慈悲であります。

地上の肉身だけを問題として泣く心は、凡夫の心であります。お念仏は、そうした限られた愛執の限定を超えた大慈悲の境であります。この大慈悲は、亡き父母を懐かしく慕う心をさらに深く、一切衆生の上に展開せしめたのであります。救われなければならぬのは、肉身の父母だけではない。一切衆生ことごとくである。如来大悲は、念仏を通して、救われねばならぬ一切有情を、暗に業苦に泣く衆生海を見出さしめ給うたのであります。

#### この順次生に

しかるに静かに、念仏の世界において汝自身の真相に目覚める時、一切衆生どころか、父母どころか、汝自身すら救うことのできない自分ではないか。何ものをも救うことのできない自分であるがゆえに、如来の本願力に救われたのであります。一切衆

生海も救われねばならぬ、そうして救うべき真の力は持つていない。この世においてどうすることもできない。ここにおいて、次の句となつてきたのであります。

第二句は「この順次生に」と仰せられるのであります。

念仏の世界において見出された、救われねばならぬものは無数であり、救う力の持ち合せはない。自らが、他を救う力のある存在ではなくて、他の力によつて救われる凡夫であつたのであります。自らが他を救う力の持主であるかのごとく考えるのが聖道門であるならば、本願力によつて救われてゆくのが浄土門であります。念仏の行者は、他を救う力のないことを知つて、救いを受け取る。現生は如来本願力の廻向によつて、信心決定して念仏申しつつ往生成仏の一道を歩ませていただきます。同じく業苦に泣く御同朋とともに、念仏して願往生の一道を参ませてもらいますが、しかしそれは、自ら救つたのではなくして、ともに如来本願力に救われたのであります。かくしてこの世は救われるものとしての道を歩んで、順次生、すなわち次の世に至るのであります。

仏になりて

しかし順次生にということとは、第三句の「仏になりて」がなければ、意味を持たないことでもあります。順次生が待たれるのは、彼岸において、弥陀と同一の証果に至り、仏の正覚を成就することができるがゆえであります。この時、自ら一切衆生を救う力を獲得するのであります。いかにわれらの現実には無いにしたところで、なければこそ、いよいよ得なければならぬのが助け得る力であります。現実の反省において見出されないもの、それが彼岸において、真実に与えられる。しかも、その証果の大因は、今日の大信心として廻向せられてあります。因は必ず果に至る。ここにおいて、念仏生活の始終は、自己の絶対完成であります。すなわち自利の成就であります。自利成就の極、利他の世界が開いてくるのが、還相大悲の大用であります。しかしながら、如来は名号の中に、二廻向ともに撰めてわれら衆生に与えて下さるのであります。和讃にいわく、

「弥陀の廻向成就して 往相還相ふたつなり

これらの廻向によりてこそ 心行ともにえしむなれ。」

衆生の上に顕現するには、往、還の次第はあつても、力としては、孕んでいるのであります。それはちようど芽を切つたばかりの苗に、すでに大木になつて多くの果実を生ずる力を潜在しているように、もしこの力がないならば、不退に生きるということとはあり得ません。現在の心行が、必然の力によつて不退であるのは、これがためであります。

高上りか真実か

世に、あるいは聖人のかくのごとき主張をもつて、あまりにも消極的である、現世的でないと言う人がありましよう。すなわち「われらはこの世で大いに人を救うのだ。未来に人を助ける、そんな生温いことでつまるか。」という声であります。それがすなわち、いわゆる聖道門的な声であります。しかしこの人は、自己に対する反省



内観が足りない。そういう人すら、「そうした力を得なければならん」と、依然として、明日に期待をかけて、実際には今日はその力なしに生きているのではないか。また、自らの作すことをもつと明かに凝視した時、自分は現在に人を救っていると言いついて得るでしょうか。自分さえまだ助かつてはいないのではないか。そしてまた、もつともつと大地の一切衆生の底なき無明業苦の相を知るがいい。そうすれば、如来本願の眞実を受け取つて生きさせていただくということが精一ぱいのことであつて、それ以上のごとはみな高上りした自惚れであることが知られてこよう。ましてや、「親鸞は父母の孝養のためとて、一遍にても念仏まをしたることいまださふらはず。そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれもこの順次生に仏になりて、たすけさふらふべきなり。」と、念仏は亡き父母に対する孝養の問題との関係であり、はてしなき有情海に対する廣大なる志願であることを思う時、いよいよ是非は明かになりました。

世に毒を播きつつ薬を考え、自損々他しつつ自利々他を考え、愚にして智者と自惚れ、力無きものが力ありと錯覚を持つほどの哀れはあり得ません。かかる間は、眞実の世界は、この人に遠いことでもあります。

### 第三節 非行非言の念仏

「わがちからにてはげむ善にてもさふらはばこそ、念仏を廻向して、父母をもたすけさふらはめ。」

#### 他力の大善

これは、聖人が父母の孝養のためとては一遍にても念仏申したことはないのご主張の第二の理由であります。

第一の理由が信心の智慧による主観的なものであつたのに対して、第二は、念仏行そのものの性質、すなわち客観的理由によるのであります。

念仏は行者のために非行非善である。わが力で成就した善根でもなく、わが智慧によつて修めた功德でもない。全く如来廻向の大善大功德でありました。わがものでも、わが力ではげむ善でもない念仏行を、わがもの顔に、父母に廻向して、追善とすることはできない。まことに念仏は、如来の御いのちをわれに廻向して、われを本質的に救いたもうものであります。それをわがもの顔に、他に廻向するということは聖人にはできないことであります。念仏を孝養に利用するのは、さらに、これを広げて、あさましい人間の欲にしたがつて、さまざまなことを利用してするでありましょう。念仏は、行じてこれを利用するのではなくて、行ずること自体のうちから、自行化他の益が自然に生れるように本願が成就して下さるのであります。

以上二つの理由が無視されるならば、第一に、聖なるものが、人間の盲愛の手段として蹂躪られてきましよう。第二に、念仏するも如来の本願大悲を見失つて、自力雑毒の念仏となりましよう。

### 第四節 念仏即孝道

「ただ自力をすてていそぎさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと云々。」

#### 念仏即孝道

人はすべて自力をすてて、三世一貫の不行に乗托して念仏申すべきであります。ただ自力をすて、仏にならしていただければ、六道四生の間、いづれの業苦に沈んでいようとも、神通方便をもつて、有縁を濟度させていただくことであります。

ここにおいて、念仏を利用して孝養の具にしたり、念仏をぬきにして孝道を見出すのではなくして、念仏自体がすなわち絶対の孝道であります。念仏すなわち孝道であります。しかも限られたる孝道でなくて、無限の孝道であります。如来の本願力に生かされる真実道を歩ませていただき、やがて成仏させていただく、そのままが孝道の成就であります。自己を絶対的に、本質的に生かされきる、これ孝の本質の成就であります。頂戴すべきであります。